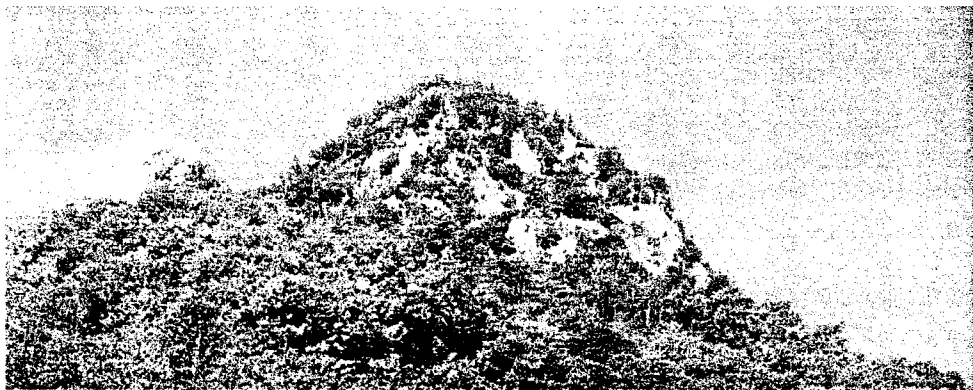


備陽史探訪の会 3月の徒歩例会

平成 15 年3月2日実施

早春の沼田本郷に
小早川氏の夢を訪ねる



担当 城郭研究部会

講師 藤波平次郎 住本雄司

早春の沼田本郷に小早川氏の夢を訪ねる

探訪コース

9:13	福山駅発(徳山行き)
9:59	本郷駅着
11:15頃	(本郷駅から町筋を歩き、恵比寿神社～両面地蔵～橋神社を経て)新高山城登山口に到着
12:30	(番所跡、鐘の段、匡真寺跡を経て)頂上(本丸)着。(約45分、昼食、説明、見学)
13:15	内郭部(釣井の段周辺)の見学
14:45頃	(西の丸、北の丸他を経て)下山
15:51	本郷駅発(岡山行き)
16:29	福山駅着

にいたかやまじょう

新高山城

所在地	広島県豊田郡本郷町本郷・舟木
別称	雄高山城
使用期間	天文 21 年(1552)～慶長元年(1596) :45 年間
創建者	小早川隆景
形式	山城
遺構	本丸・井戸・郭・寺跡・門跡等。各種の郭 60 余、その他建物基壇、石垣等多数の遺構
規模	山 700m×900m。縄張りは東西 400m×南北 500m。 標高 197.6m。比高 186m。
文化財指定の有無	国指定史跡
関係主要文献	「小早川家文書」「萩藩閥閥録」「陰徳太平記」「三原市史」

応神社・神功皇后をおまつりした社で、その昔応神天皇が西国に旅をされたとき宿泊された土地だと伝えられている。本郷の氏神様として毎年10月5日がお祭りの日となっている。



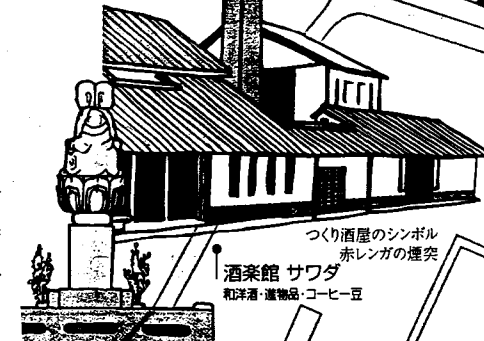
卍
円光寺

どこまでも伸びる
龍臥の松

天保の頃、飢餓と悪疫の流行で多く子供が亡くなりました。尼寺の大庵実悟禅尼は、これを哀れと思い、慰霊と供養のために願主となり、下市と上市の地藏様を建立しました。それ以来、町内に悪疫の流行のなくなり毎年7月23日を命日とし、二十三夜地藏祭りが行われるようになりました。お地藏さんは、子供の霊護る菩薩様で両面地藏は悪疫退散と交通安全に2倍大きなご加護があると言われています。



日本たばこ産業倉庫



つくり酒屋のシンボル
赤レンガの煙突

本郷グランドホテル
宿泊・会議・宴会・娯楽

観光案内所_

タクシーのりば

スのりば

町宮駐輪場

本郷タクシー
取次所
フードショップオカノ
ハンバーガー・ポテト・ソフトクリーム
鈴木事務所

広島県立本郷工業高等学校

大正通り

マルヨシ洋品店
婦人服・学生服

やまもと化粧品
化粧品・コスメ・衛生薬

東本通り



くすりの杉原

トムエリーゼ

木郷プラザ

ユアーズ本郷店

この社は、文録4年本郷の商人が発起して
建立された商業の神様をお奉りしてあります。
鳥居には腹の向き合った鯛・鯛の形の手水鉢・
こま犬も子供に乳をやっており大変珍しい
ものである。



商店は商工会青年部、ぽっぽカード加盟店、飲食店を中心に載せてあります。

広島空港行——●
リムジンバスのりば

新 高 山 城 跡

竹原小早川家から本家沼田小早川家をつぎ高山城へ入城した隆景は、副留としていた沼田川対岸の砦を修築し、天文21年（1552）新高山に本拠を移した。新高山山頂からは沼田川流域や河口の展望がよくきき、水運の便もよく、また、家臣の人心一新のため城替えしたといわれる。

新高山城は沼田川をはさんで高山城に対峙し、北側と東側は沼田川によって天然の濠をなしている。標高197.6m、東よりの中腹以上の斜面には岩石が露出し、いたるところに岩壁がそそりたち、するどくそびえた峻厳な山容である。

城の縄張りは東西約400m、内郭は頂上尾根や鞍部を巧妙に活用して本丸・東の丸・ライゲンガ丸・中の丸・釣井の段（井戸郭）・西の丸・北の丸等が構築されている。外郭は斜面の中腹から張り出した2つの尾根を利用し、大手側を固める意図をもって巧妙に配設され、匡真寺跡・鐘の段・番所跡・紫竹の丸・シンゾウス郭・大手道などがある。これらの郭はすべて地山を削平し、又は、切削り、あるいは掘切り、必要な箇所は石積で補強し、随所に帯曲輪や腰曲輪で結ばれ、また、箱薬研堀、空堀、塹堀を設けている。とくに近世城郭に関連する桁形城門の採用が各所にみられる。

三原城修造の際、この城の石垣の大石を残らず三原に運んだといわれているにもかかわらず、まだ各所に石垣の一部が残存している。また、山頂に近い井戸郭には、立派な石積みの大井戸が6ヶ所あり、多勢の武士や婦女子が山上生活をしていたことを物語っている。このように大規模な山城としては、美濃の岐阜城跡・越後の春日山城跡とともに、日本三大山城の一つといわれ、中世から近世への過渡期の城跡研究には欠くことのできない貴重な城跡である。

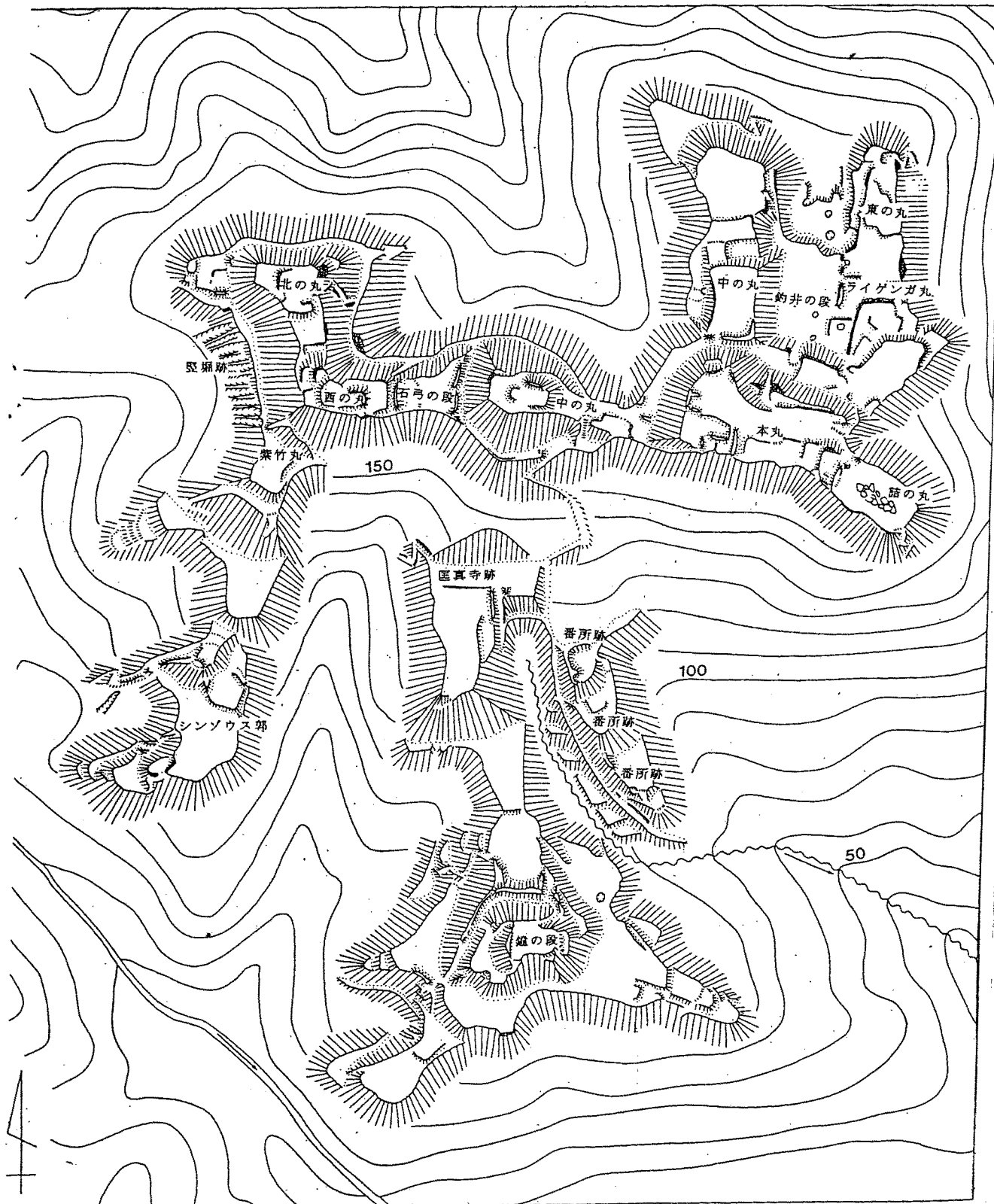
隆景は永禄10年（1567）ごろから三原城を前進基地として重んずるようになり、後に移封によって伊予の道後（湯築）城、筑前の名島城と居城を移すが、この間も、新高山城を小早川氏の本拠の城として確保した。しかし、慶長元年（1596）、新高山城を壊し、その石で三原城を修築、隠居所と定めた。

隆景は新高山城を45年間使用したが、永禄4年（1561）には毛利元就・隆元の父子が10日間滞在し、会所、表座敷、裏座敷、高間、常の茶の湯の間などの建物で、連日能楽や連歌、太平記読みなどを催して饗応接待している。

また、天正5年（1577）には南側中腹の郭に雲門山匡真寺を建立し、父元就の7回忌、母妙玖の33回忌の法会を執行している。安土城などとともに、近世城郭への移行期における典型的な山城である。

小早川氏城跡関係略年表

年	事 項
建武 5 (1338)	南朝方、小早川頼平、景平ら高山城に立てこもる
文和 4 (1355)	南朝方が小早川氏の本拠の高山城を攻撃する
応仁 1 (1467)	竹原小早川家が沼田小早川家の高山城を攻撃する
天文 8 (1539)	大内氏が高山城を占拠する
20 (1551)	小早川隆景が高山城に入城する
21 (1552)	小早川隆景が新高山城に城易を行う
22 (1553)	三原要害に八幡原基直を在番に置く
永禄10 (1567)	小早川隆景、三原城を築く
慶長 1 (1596)	三原城修築のため新高山城の石垣の大石を三原にはこぶ
慶長 5 (1600)	関ヶ原の戦後、福島正則が重臣5名を三原の警備あたらせる
元和 5 (1619)	福島氏の改易により、浅野家家老浅野忠吉に預けられる
明治 4 (1871)	三原城は広島本藩に返還される
26 (1893)	三原城本丸跡に三原駅設置
昭和 9 (1939)	高山城跡への道路の拡張が行われる
32 (1957)	小早川氏城跡（高山城跡・新高山城跡・三原城跡）史跡に指定
50 (1975)	三原城跡保存管理計画の策定
53 (1978)	新高山城跡保存管理計画の策定
59 (1984)	高山城跡保存管理計画の策定
平成10 (1998)	小早川氏城跡の追加指定及び名称変更



番所跡

軽石の段・中の段・下の段の 3 郭からなり、大手道を警固する番所が設けられていたところである。この番所の東方と西方にもそれぞれ東の番所・西の番所と呼ばれる郭が残っている。

鐘の段

城山の南斜面の中腹に半独立的な小丘をなしている郭で、北方背後に土塁を設けた二郭、東側に大小二郭、西南側に三段の郭を配置している。これらの郭群は、地形・縄張りなどからみて、中世初期の独立した山城（丘城）の形態をなしており、この部分の築城年代は古いものと思われる。

匡真寺跡

小早川氏の菩提寺跡で、隆景は天正 5 年(1577)、亡父毛利元就の七回忌、亡母妙玖尼の 33 回忌に際して、ここに匡真寺（現在の三原市宗光寺）を建立し、法会を盛大に営んだ。

寺跡は東西 41m×南北 72mの広さがあり、全面にわたって瓦片が散乱し、築庭を思わせる湧水池・築地堀の跡などが残っている。

中の丸跡(二の丸)

本丸北方に 4 段の郭からなる東の丸、井戸郭・ 5 段の郭からなる中の丸、西側にも 4 段の中の丸の各郭群が配置されており、これらが二の丸の縄張りである。

中の丸の郭には随所に土塁を築き、腰郭を設けて防備を固めている。また北方の中の丸の広い郭には礎石の配置が一部みられ、規模の大きな建物があつたことが知られる。

大手門跡

大手門を登りつめた山頂部の入口にあたり、外柵形の総門の跡と推定される。三原市本町の宗光寺山門（重要文化財）は、この大手門を移したものと伝えられている。

本丸跡

山頂尾根筋を削平した 4 段からなり、東西 125mに及ぶ広大な郭で、西側と北側の斜面は巨石による石垣で補強している。東端の最高所は巨石が露頭しているが、この上に櫓をあげていたものと思われ、近世城郭の天守台にあたる郭である。

本丸の広い郭には、居館の跡と思われる礎石が一部露出しており、また西側の中の丸からの登り口にあたる本丸西南隅には内柵形の跡が残っている。

釣井の段(井戸跡)

本丸から北へ延びる東の丸と中の丸とに挟まれた両尾根の間の低地を利用した上下 2 段の郭である。東西・南北とも 50m余で、城内最大の面積がある。

上段の郭には直径約 2mの円形石積井戸が 4 基、下段の郭には直径約 4.2mと 2.2mの円形石積井戸が残っている。いまなお清水をたたえているものもあり、城主をはじめ多くの家臣団の城内での生活を物語るものである。

三の丸跡(西の丸跡・北の丸跡)

中の丸に続いて西方に配置された 4 段が西の丸で、これからさらに北西に延びる北の丸の 5 郭が連なっている。これらが三の丸の縄張りである。

西の丸の東端の郭は石弓場と呼ばれるが、それ自体が二の丸を守る箱葉研の掘切の役割を果たしている。

また、北の丸の中心的な郭には石積みの方形基壇が残っており、社寺に類する建物があつたと思われる。

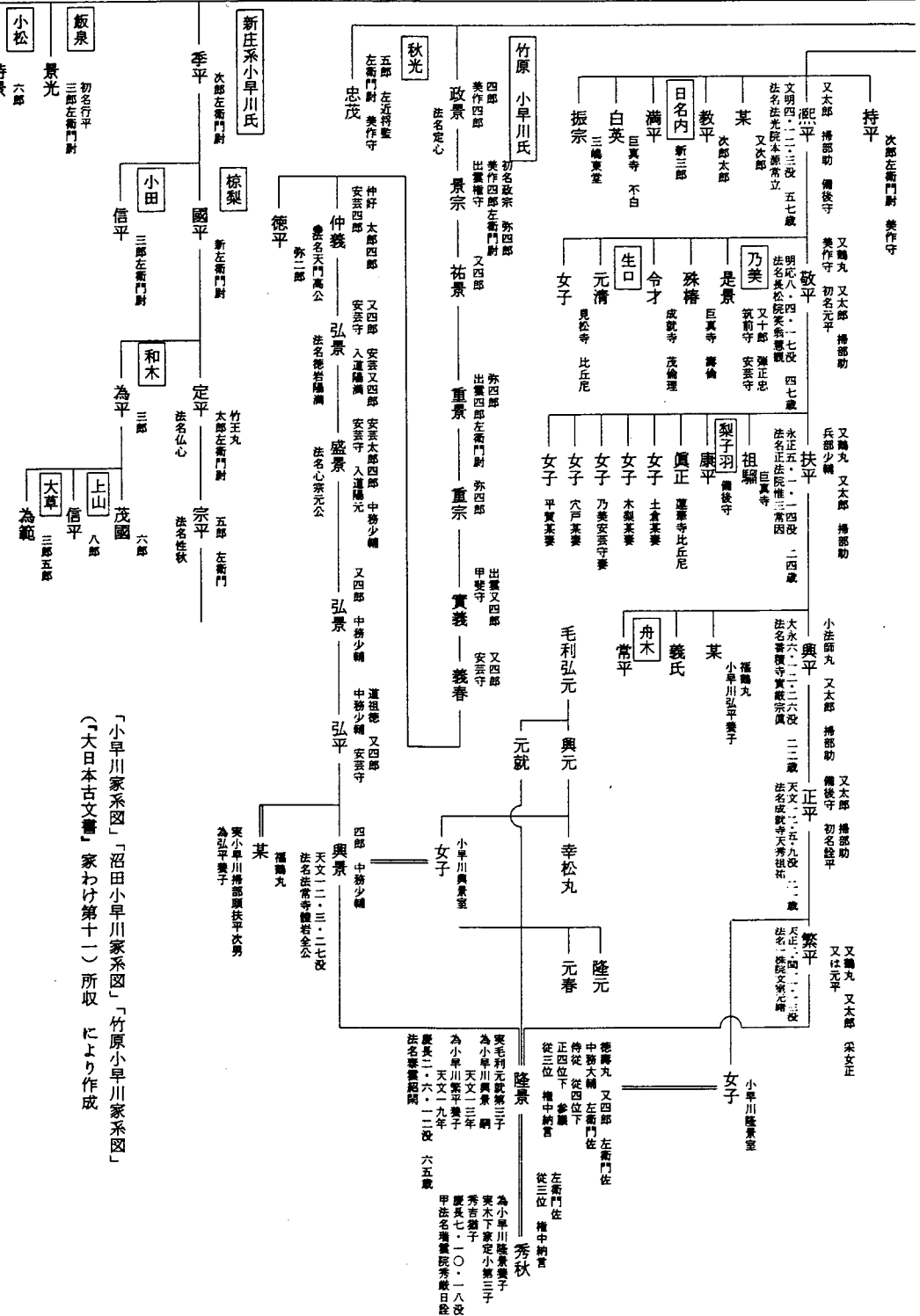
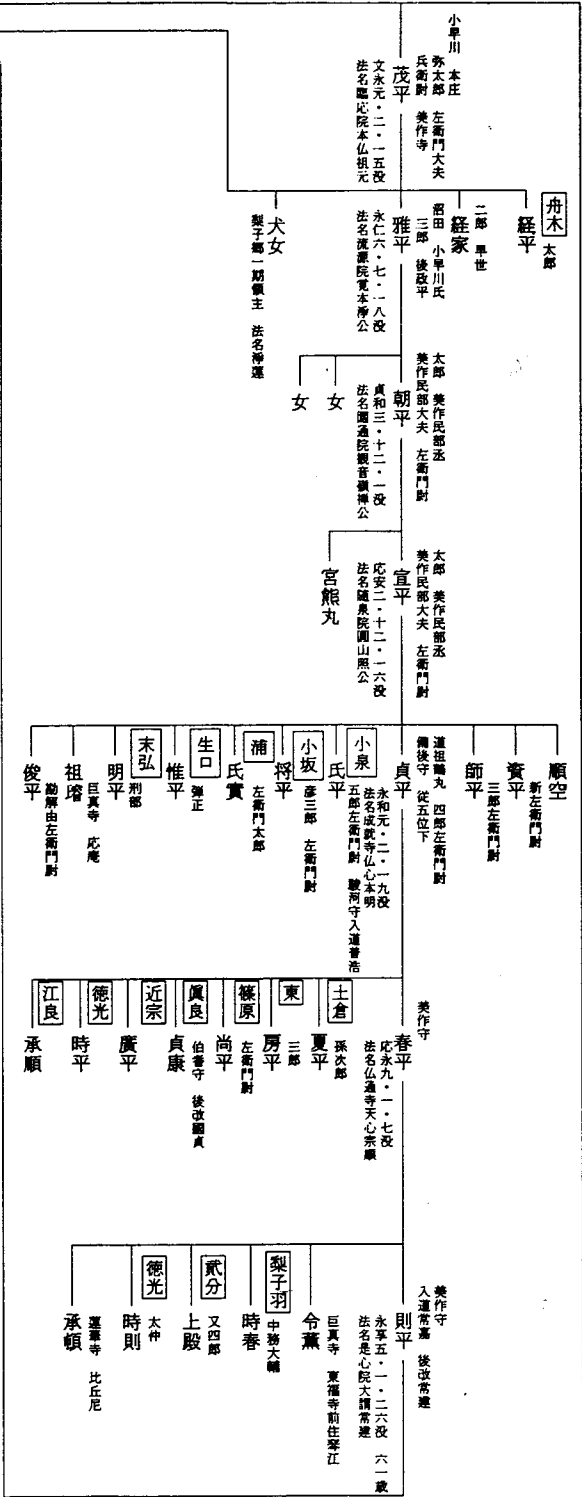
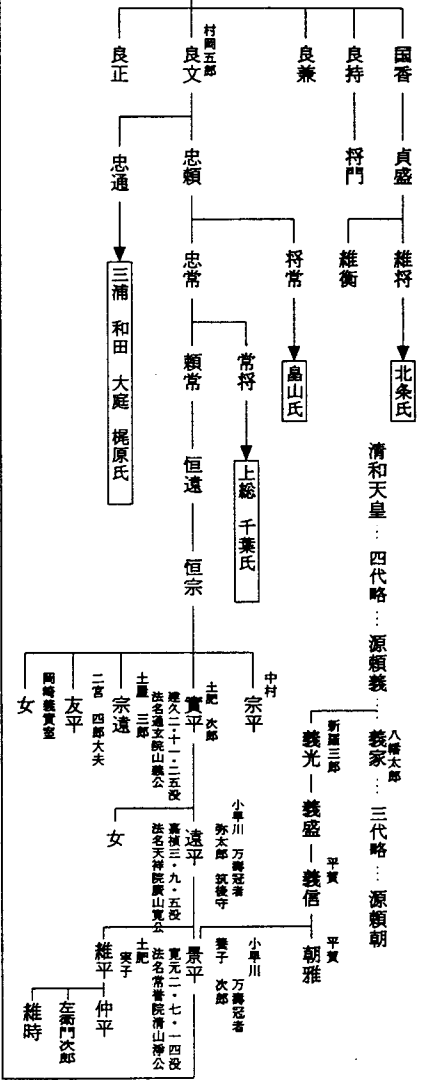
本城跡は小早川氏の本拠の城で、16世紀半ば頃に東の高山城から移り、その後三原城に本拠を移すまで使用された城である。城内の様子は「小早川家文書」に収められている1561（永禄4）年の「毛利元就父子雄高山行向滞留日記」に詳しい。これによると、匡真寺、能舞台、会所、高間、裏座敷な



新高山城図 (安達幸則・稲葉桂阿氏原図参照、ケバなし輪郭のみ雨氏の図による)

小早川氏略系図

桓武天皇 — 葛原親王 — 高見王 — 高望王



「小早川家系図」「沼田小早川家系図」「竹原小早川家系図」
 「大日本古文書」家わけ第十一所収 により作成

『小早川家文書』に「毛利元就父子雄高山行向滞留日記序」が収められている。この史料は永禄四年（一五六一）三月二十六日から、毛利元就父子が小早川隆景のいる雄高山城を訪れ、隆景ら小早川家あげて毛利宗家をどのように饗応したかを綴った記録である。この記録の中から新高山城の様子が垣間見られるのである。要約すると次のようになる。

三月二十六日、元就ら一行は郡山城を出発して、この日棕梨弘平の館に入り、翌二十七日、雄高山に着き、隆景らは麓まで出迎えた。元就はまず井上春忠の屋敷に入り、馳走された。この時隆景らも相伴して、隆元は巨真寺に宿することになり、夜に入り、元就の宿所へ出掛け祝宴となった。この時元就、隆元、隆景のほか福原貞俊、栗原源次郎、桂元澄ら三十一人が祝宴に参加、熊谷信直、保利中務少輔からは酒肴などが宿所に届けられた。

三月二十八日は屋過ぎから雨であったが、城中の御会所で儀礼の席が設けられ、棕梨弘平が奏者となって、饗応がなされた。この折会所建築の饗応の間には、押し入、御手掛があり、御瓶子に鳥と鯉が置き飾りされ、元就、隆元と宿老八人が飾られた上座にあって、式三献ののち七五三の本膳料理（七種の膳、五種の膳、三種の膳が次々と並ぶ）が三十人分振舞われ、膳がかわることに能の高砂、夕顔など七曲題が上演された。本膳が終り、菓子が振舞われこの時茶が出されたのであろう、次に酒宴となった。酒献は十九回分なされ、その都度、両家の宿老たちが酌をして、品々が下賜または献上された。饗応が終ると、湯屋に入り、床についたが、この日のため御再進、御湯、御座敷、燭燭の各奉行が小早川家より十二人任命されている。

三月二十九日は元就、隆元から、御女中衆へ御裡座敷で、御礼の席が設けられ、竹原にし殿、御新造様、ひがし殿が御裡座敷で面談、女中衆には樽や板金などが進上された。三月晦日には、梨羽宣平の屋敷で饗応されたのをはじめ、桂右衛門太夫私宅でも饗応がなされた。閏三月朔日は、再び御会所で元就、隆元を隆景が饗応、双方の御相伴衆と共に祝宴を開き、式三献、五三々の本膳、十五献に及ぶ宴が夜中まで催された。閏三月二日は、城中の高の間で、連歌会が挙行され、その後、城中の庭で蹴鞠の会を見物、さらに隆景による「太平記」の講読が披露された。この夜は隆元は奥の御座敷で寝たと記される。

閏三月三日は、夜になって会所で三組の膳が用意され、毛利家宿老たちを慰安した。翌四日は、毛利隆元による弟隆景への慰労が巨真寺で催され、五日には、再び能上演を含む饗応がなされ、十五献まで繰返され、夜中に及んだ。六日は、いよいよ元就が帰る日で、太刀が隆景より元就、隆元に進上され、栖真寺で、行列が整えられた。元就、隆元は滝を見物したいということで、隆景は、栖真寺で一献に参し、数百人の毛利家伴衆と座敷で別れを告げた、とある。

以上の日記をみると、新高山城にあった殿堂建築の一部が判明する。まず注目されるのは、井上春忠の屋敷が、新高山城の宿である麓の町場、もしくは集落に接する形で営まれていたことで、「元就様、御止宿、井上又右衛門私宅」と記される。新高山城の麓に小早川家中の屋敷地が営まれていたのだろう。隆元は到着時に父元就とは別の処を宿所とした。隆元が入ったのは巨真寺という寺院で、おそらく同じ日記にみる栖真寺と同じ寺院だったとみられる。隆元は巨真寺より夜になって饗応の宴が催される井上邸へ、下って出掛けたとあることから、巨真寺は、おそらく巨真寺跡または大善寺跡と呼ばれる雄高山中腹の「中城域」にあったとみられる。

巨真寺のあったとみられる中城域には、「御会所」と記される会所建築があった。三月二十八日の本膳饗応、閏三月朔日の饗応、閏三月三日の饗応など公式接待が挙行される広間があった。座敷飾りなどが置かれ、能舞台が広間から鑑賞できる位置にあったようだ。舞台では元就、隆元、隆景が座して、女房衆や国衆などから品々や折紙が進上される場にも利用されている。

公式行事が催される会所建築の広間は「御座敷」と呼ばれていたようだ。饗応の宴があるたびに「御座敷奉行」が任命されている。

饗応の宴席は式三献から本膳料理と十九献（一献ごとに異なった料理や肴が用意された）の酒盃、さらに菓子と茶湯などから成りたつ。これを調理し、配膳するスペースである台所や清所の空間、膳具や調度品を格納しておくスペースもなければならない。会所建築は、座敷のほか、控えの間や、以上あげた付属建物が存在したはずである。

会所建築に付属していたものか、別棟の建物であったかは不明であるが、日記をみると裡座敷、高の間、奥の間、茶湯の間および「鞠之御会」が挙行されたスペースもあった。まず女房衆らに元就隆元がお礼に出向いたとある「裡座敷」である。裡とは裏のことで「裏の座敷」ということになる。室町期の武士の屋敷は主殿造りと呼ぶ来客や政務を執行する座敷が表側にあり（平側正面区画）、主殿の棟行の表側でない半分である裏側を日常生活の場としていた。正面のへれに対し、生活空間のケと呼ぶ裏側からできており、この主殿の主屋とは別に台所を含めた清所と呼ぶ建物や会所が別棟で建てられていたのが一般的であった。発掘調査で出土した遺構が展示してある朝倉氏一乗谷館でも、別棟で主殿、会所、清所などが並び建つ構成であった。日記にいう裡之御殿が、会所建築の裏部分であるのか、別棟の主殿の裏にあたるのかは明確でない。しかし女房、女中衆が日頃詰めていた所となれば、会合や宴席が行われている会所の裏側とは考えにくい。別棟の主殿の裏の座敷と解されよう。

閏三月二日には「高之間」で連歌会が催されている。元就・隆元・隆景のほか宗俊・宗賢という連歌師でもある人々ほか十二人ほどが同席している。日記によると、

若木より見ん世も久し花の春 元就
霞の月にかへ寺松か枝 隆元
山風も長閑なる夜の明初て 隆元

の句が記されている。この高之間は連歌に詠まれている情景からも、雄高山山頂部のおそらく本丸といわれる辺りに建つ亭建築で行われた連歌会であらう。文明年間以降の有力国人領主層の居城には、金閣、銀閣風の亭建築があったことは、諸記録で確認できる。高之間とは、亭建築内の座敷だったと考えるのが自然であらう。

鞠之会が挙行された閏三月二日には隆景による「太平記」の講読披露が行われた。日記によると「隆景様、常之御茶湯之間にて一芸ヲ召テ、読侍ニテ候」とある。新高山城には茶の湯処である茶亭もしくは茶室が存在していた。「常之御茶湯之間」とあることから、炉が切られ、茶道具類が常備されていたとみられる。この茶湯之間で、点前を披露したあと「太平記」の講読が行われた。鎌倉武士以来、武家社会では、「兵法七書」「源平盛衰記」「吾妻鏡」を教材に購読会が催されたり、さらに「古今和歌集」「源氏物語」などを講読して、教養を身につけていた。室町期には「太平記」を兵法・戦略上からも勉強することが武家社会で盛んであった。

太田道灌には「静勝軒記銘詩序」によると、碎石類題と名付けられた私設図書館が江戸城内にあったと記される。新高山城内には図書館とはいえずとも書棚をもった和漢籍書が常備されていたことは確かだ。隆元は、隆景の「太平記」の講読が終わると、この日は疲れたのであろう「今夜奥之座敷」で寝た、とある。この奥座敷は、女房衆のいる裡座敷とは明らかに別の部屋で、おそらく、茶亭の奥まった所にあった建物であらう。

たびたび記した鞠之会が催されたのは、おそらく会所に面した庭であったとみられる。蹴鞠は、室町武家社会でもかなり流行していたとみられ、清洲城での斯波氏が催した蹴鞠の会や、織田信長が二条城で催した蹴鞠の会などが記録に残されている。

付録

隆景が新高山城に移った理由

- (1) 吉田郡山城から家老や家臣を連れてきた、竹原小早川氏の家臣全部、それに本郷小早川家の家臣全部が一緒になるので人心の一新を図る。
- (2) 陰陽師の占いによると古高山城は女山と称し、城を守るに侍 360 名を必要とするが、新高山城は男山と称し、城は僅か 75 名で守れる。
- (3) 瀬戸内を制するものは国を制す…家臣も瀬戸内沿岸や島にも多く進出しており、新高山城の麓の御船八所から沼田の入海また三原沖の海まで一望できる。

(「沼田本郷風土記の里」本郷町観光協会)

『毛利元就父子雄高山行向滞留日記』連歌注釈

永禄 3 年(1560)2 月、毛利元就(64 才)は陸奥守に任じられ、当主・隆元も従五位下、大膳大夫に叙任された。これは正親町天皇の即位にあたり、多額の献資を行った功績への報酬である。室町将軍・足利義輝も、毛利父子の朝廷への貢献を評価し、隆元を安芸国守護に任命し、元就には錦の直垂の着用を許可した。小早川隆景は、おそらくこの慶事を祝賀するため、毛利元就父子を自城・雄高山城に招待した。

永禄 4 年(1561)3 月 26 日、毛利元就父子は、福原貞俊・桂元澄以下、家臣を 20 名程度随従させて吉田郡山城下を出立した。雄高山城に到着後は、連日のように祝宴に明け暮れた。

滞在 6 日目の閏 3 月 2 日、晴天。現代太陽暦では 4 月 26 日に相当する。まさに毛利父子のゴールデン・ウィークの真最中ともいうべきこの日、高間に連歌会が行われた。元就、隆元、隆景ほか 11 名が参加し、河内五郎が書記として臨席した。

発句・元就

「若木より 見ん世も久し 花の春」

私は「若木」であった頃より、毛利の花を咲かせたくて、
時代の激流にのまれながらも、頑張ってきました。

いつしか年月が経ち、私も年老いたけれど、
ようやく今日この時、

毛利の家の花の盛りを見ることができました。

脇・隆景

「霞乃月に かわす松が枝」

父上のおかげで、

「松の枝」のようにかほそい存在である私も、
おぼろ月夜の静けさの中に、泰然自若としていられるのです。

(毛利の花を咲かすためには、

さまざまな武略・計略・調略が「交わされて」きたのでしょうか…)

第三・隆元

「山風も 長閑なる夜の 明け初めて」

父上のご苦勞、弟たちの協力のおかげで、

今日この日のお家の繁栄がもたらされた。

あとは私にお任せください。

時代の「風」となり、

毛利家をもっともっと強大にして参ります！

以上は、インターネットで連句を発表されている笹心太氏に解釈をお願いしたものである。これら三句には、「連歌の務め」とされる「月」と「花」が、いきなり詠み込まれている。それは、年賀・慶事・ことほぎの場で用いられる「三つ物」という連歌形式だそう。

後につづいて 11 名の連衆が、更に祝賀の歌を連ねていくのであろうが、事実上、冒頭三句で作品は完結を見ている。

(住本雄司 記す)